



矢島 渚男 選

さびりさびりさびりさびり雪おとす

宇都宮市 松広 訓

【評】今年の大雪の中で雪を落とす擬音が珍しい。積雪の上に溜った重い雪を落とす音が。私も初任地が豪雪地で経験がある。面白くも楽しくもなく憂鬱な重労働だった。虚偽虚構飛び交うX寒の闇

東京都 奥村 和子

【評】現代社会の狡猾な実相をえぐった句。闇を飛び交う嘘が大衆政治を動かしている。Xはマスク氏が所有するSNS。共和党大統領候補は終盤で彼と結んで敗勢を逆転した。冬されやシベリアの地に父の骨

大阪市 小山 淑子

【評】作者は大戦後のシベリア抑留で父親を亡くしている。いまも続く御家族の無念の深さを感じる。春ささす乳牛舎にはヴィヴァルディ

茨城県 星野 芳美

早寝して朝寝坊して春を待つ

神奈川県 中島やさか

太腿にまだ力あり雪を掻く

高島市 足立てるを

寒さにもほころびつぽみ白椿

相模原市 尾関 まこ

泊り客二階に迎へ年新た

伊万里市 田中 秋子

二拍手のひとつしぐし初詣

佐野市 村野 則高

かんじきを担いで村の初詣

さいたま市 曾我部 満

高野ムツオ 選

寒卵こつんと割れば躍り出づ

三郷市 吉村 喜子

【評】殻の割れ目からするりと抜け出し姿を現した寒卵。黄身も白身もこんもりと盛り上がりつつ弾むばかり。割った瞬間の描写が実に的確。卵掛けご飯を頂く場面だろう。雪の花浪漫的を超えるなり

岐阜市 鈴木 隆

【評】雪の花は雪を咲く花に見立てた季語。ロマンチックな世界をさらに超える美しさというところか。朝、積もった雪を見た驚きであろう。七草の一片残りをり厨

東京都 内田 恵子

【評】無病息災を祈り七草粥を食べた。後片付けに厨に戻ったら、どの若草かしの皮が一片残っていたのである。鮮やかな緑が印象的。雪しまき強力のみな前のめり

北本市 萩原 行博

奥能登の地震の瓦礫に雪は霏霏

対馬市 神宮 齊之

神様の飲んであるさうな寒の水

相模原市 はやし 央

しあはせのやうに寒九の雨来る

日立市 菊池 風峰

薄水の探幽模様さきらきつり

甲斐市 松田 健嗣

薄水やゆつくり動く喉仏

京田辺市 加藤 草児

豆まきの一升杓に無骨な手

神栖市 山上ふみ子

正木ゆう子 選

目の奥に蝶のよな骨風光る

岡山市 行安 知子

【評】蝶が羽を広げた形の蝶形骨があるのは、目の奥、頭蓋骨の真ん中あたり。普段は何も感じないが、この句は季語によって、その骨を光の中の蝶のように意識させて、快い。逆わぬことにも慣れて寒日和

芦屋市 田中 俊

【評】何に逆わないのか。妻という解釈が微笑ましいが、「何」が特定されていないので、他にも色々想像できる。平穩の秘訣かもしれない。金平に大根の皮も母の味

射水市 盛田まゆみ

【評】金平といえは牛蒡と人參だが、大根の皮は私も入れる。ちなみに人參もちでは皮だけ。皮の活用方法としても、金平は最強の美味しさだ。エンピツを転がすゆとり卒業す

八王子市 小柳 清治

手足顔それぞれ違ふ寒さかな

入間市 豊泉 繁雄

二十年カフエを営み破産矢受く

東京都 関塚このは

妻なくは命惜む日々なりし

八王子市 斎賀 勇

幾度もよ火鉢のころの灰神楽

狭山市 平野 和士

臘梅や今日引越して行きし家

東京都 松永 京子

長生きもまあ一仕事寒雀

久留米市 緒方 英精

小澤 實 選

河豚呑んで鰻やがてもだえけり

津市 中山 道春

【評】鰻に近づいた河豚が、一口で吞まれてしまった。しかし、鰻の身に河豚の毒がまわってきても、だえ苦しんでいる。鰻は助かるまい。海底のドラマである。おでん屋の重文級の店構へ

栃木県 あらひひとし

【評】歴史あるおでん屋で、店構えも立派で、重文クラスの重々しさがあるというのだ。おでんとともに店構え自体も奇になりそうさだ。大枯野うしてここにおるんだらう

松江市 三方 元

【評】大きな枯野に来てみて、何のためにここにいるのか、わからなくなってしまう。大枯野という場所では、そんなことが起こりそう。鎌倉に小町通りや実朝忌

下妻市 神郡 貢

文庫の自裁の部屋の寒さかな

稲城市 山口 佳紀

スペインヘゲルニ力見んと冬休み

旭市 高野寿美子

海雲酢のものうずらの卵割り落とす

松山市 久保 菜

天井を走る電車やおでん酒

横濱市 菅沼 葉二

家具元にもどして戻る新年会

長岡京市 みつきみずす

御降りや父の柏手びんびんと

上田市 小山 渥子

うたみくじ

短歌あれこれ 江戸雪 (歌人)

昨夏から月に一度、染野太朗さんと大阪市内の大正ヨリドコマルシェで短歌のワークショップをしている。作歌するというより短歌について自由に話をしようという試みだ。そこでうたみくじを作ってみた。昭和から令和の歌人の短歌を紙に書き留めたものを引いてもらう。人はすぐいなくなるから話してよ 見たことのない海のはなしを 佐藤弓生

ワークショップには歌人が遊びに来てくれることもあるのだが、ほとんどは短歌にこれまで触れたことのない人たちが。ふいに会った一首から思わぬ方向に話の広がることが多い。戦時中に友人と見た海や辛い失恋が蘇る人もいれば、小説仕立てにして感情移入する人もいる。そこにはふだん自分が歌会で歌人たちと切磋琢磨しているのとは全く違う手触りがあり、短歌は心の中で柔らかく膨らむものなのだと気づかせてもらえるのだ。



題字デザイン・イラスト 福田美蘭